

底冷がする。女の手はヒヤだらけだ。

彼女の頬は熟れてゐる。

おぢいちゃんの水涕をすゝり乍ら、いつもの晩酌をやり出した。

うづら豆と、豆腐と牛蒡を皿に盛つて、酒をよばれて僕は歌を唄つたり、御飯をたべりした。

彼女は其處まで送ると言ふ。

赤い手袋をはめてゐる。

木刀の端を女に凭せて、寒い川風に吹きまくられ乍ら、人家のまばらな国道を、二人は心中の

場へ急ぐ様な氣持で歩いた。

郵便自動車が追ひ越して走つて行く。

月のない夜の九時過ぎだ。

女は遂々町の入り口の、石橋の所まで來た。

何うしても歸ると言つて聞かない。

僕は彼女の手を握つて放さなかつた。